東南アジアへの半期留学を通して、地球社会の課題に挑む人材を育成

青山学院大学　地球社会共生学部

2年次の留学に向けて、英語の集中授業を受けるほか、自主学習にも力を入れています

1年次には、英語の授業が週6コマあります。それでも希望の大学に留学するには、英語力が不足していたため、授業の空き時間に、先生に苦手のスピーキングの指導をしてもらいました。（平松さん）

タイでフィールドワークに挑戦。主体的に学ぶ大切さを学びました

タイと日本の住居の違いについて調査するため、現地の方にインタビューしました。調査手法やまとめ方も1人で考えるため、自分で学びを進めていく大切さを実感できました。（栂野さん）

留学先で世界各国の仲間と学び、視野が広がりました

私が留学したマレーシアの大学には、アジアや中東から留学生が集まっていました。ともに学び、寮で一緒に生活をすることで、多様な視点や価値観を知ることができ、視野が広がりました。（平松さん）

地球規模の4つの課題を4つの領域から学ぶ

2015年度に新設された青山学院大学地球社会共生学部は、地球規模の様々な課題に対応できるグローバル人材を育成している。同学部のカリキュラムには、大きく2つの特徴がある。

1つめの特徴は、地球規模の課題の中でも社会科学で取り組むべき「差別、貧困、紛争、情報格差」の4つの課題に焦点をあて、それらの解決に取り組む上で必要な4つの専門領域（＊1）が設けられていることだ。4年生の平松賢（さとる）さんは、その幅広い学びにひかれて入学した。

「高校時代には、世界平和に関心

地球社会共生学部
地球社会共生学科4年
栂野絵美
とがの・えみ
埼玉県・私立淑徳与野（しゅくとくよの）中学・高校卒業。海外展開する住宅メーカーに就職予定。

地球社会共生学部
地球社会共生学科4年
平松 賢
ひらまつ・さとる
静岡県立静岡高校卒業。イギリスの大学院への進学を希望している。

＊1 紛争について考える「コラボレーション領域」、貧困を克服するための雇用や産業創出方法を学ぶ「経済・ビジネス領域」、情報インフラのない地域で何が起こっているか、何を知らせるべきかを学ぶ「メディア／空間情報領域」、差別の現状と発生メカニズムを解明する「ソシオロジー領域」。

がありましたが、何を学びたいのかは決まっていなかったので、4つの専門領域を学べる点は魅力でした」

2年次前期に領域とゼミを選択し、専門分野を深めていく。4年生の栂野（とがの）絵美さんは、次のように話す。

「1年次に『文化人類学入門』を履修して、文化と宗教について学びたいと思い、『コラボレーション領域』を選びました。ゼミでは、キリスト教について研究中です。1つの領域を選択しても、他領域の科目も自由に選択できるため、幅広い学びを実現することができます」

半期留学で、専門を学びつつフィールドワークにも挑戦

2つめの特徴は、2年次後期から、タイとマレーシアの学部間協定校の8大学のいずれかに原則として、半期留学することだ。現地の学生や他国の留学生とともに、専門科目を英語で学ぶ。そのため、英語の授業を1年次には週6コマ、2年次前期には週4コマ受け、英語4技能のレベルアップを図る。

平松さんは、マレーシアの国立マラヤ大学で国際政治学を学んだ。

「留学前は、国際政治学の入門しか学んでいなかったため、最初は、他国の留学生の知識量に圧倒されました。自分もしっかり授業についていきたいと考え、日本にいた時以上に予習・復習に力を入れました」

留学先では「フィールドワーク」が推奨されている。現地で課題に感じたことの中からテーマを設定して現地で調査を行い、帰国後にその結果を報告する。タイに留学した栂野さんは、住居について調べた。

「大学周辺を散歩していた時、現地の住居の外観が日本の住居と異なっていて、興味を持ちました。調べてみると、タイの住居にはキッチンがないことが分かり、その理由を調査することにしました」

テーマは決まったが、栂野さんが悩んだのは調査手法だった。当初は、現地の方からアンケートを取るつもりだったが、タイ語の質問用紙作成が難しかったため、断念したという。

「調査手法は英語が話せる人へのインタビューに変更しました。話を聞くと、タイでは共働きが多く、自炊するよりも屋台で食事をする方が安いため、キッチンが必要ないことが分かりました。日本にいる先生とは、インターネット電話などで相談しましたが、現地で動くのは自分自身。留学後は、何事も積極的に行動できるようになったと感じます」

留学は、語学力を高めたり、専門性を深めたりするだけでなく、多様性に満ちたアジアで、世界の学生とともに学ぶことで、課題解決力など、グローバル人材に必要な能力を身につける場となっている。

東南アジア留学を通して将来の道が明確になる

半期の留学を経て、2人は将来の道が明確になったという。

「タイの住居を調査し、住宅に興味を持った経緯から、住宅業界を中心に就職活動を行い、内定をいただきました。面接では、海外で自分の力で調査研究したことを評価してもらえたと感じました」（栂野さん）

「ゼミや留学先で『国際政治学』について深く学び、帰国後には『政治思想』を履修し、自分が学びたいのは、その2つを橋渡しするような哲学的な学問分野だと気づきました。日本にはその分野の研究者がまだ少ないため、イギリスの大学院に進学して、研究者を目指したいと考えています」（平松さん）

大学の思い

幅広い知識と主体性を武器に活躍できる人材に

地球社会共生学部
学部長
平澤典男
ひらさわ・のりお

東南アジアでの留学を原則としているのは、世界経済の新たな牽引役として期待が寄せられている国々で学び、それらの国々が直面している課題に向き合うことで、社会で必要な課題解決力を身につけてほしいからです。そうした力を高めるためには、狭い分野で突出した知識を身につけるよりも、経済、政治、文化などを幅広く学ぶ必要があります。そこで、本学部は、社会科学における4領域のカリキュラムを用意し、駐在員経験者などの実務家を数多く教員に迎え、実践的な学びを提供しています。また、異文化社会での学習や生活を通して、主体性、積極性、リーダーシップ等のコンピテンシーを高めることも期待しています。

2019年3月には、第1期生が卒業しますが、内定先企業は多岐にわたりそうです。現在、上場企業のほとんどがアジア進出をしており、グローバル部門やCSR（＊2）部門を設けています。どのような業種に就職しても、そうした部署で課題解決に向けて主体的に動ける人材を育成していきたいと考えています。

＊2 Corporate Social Responsibility の略。企業が自社の利益の追求だけでなく、事業活動を通して社会に貢献する責任のこと。